平凡社新書

1055

宮田律
MIYATA OSAMU

ガザ紛争の正体

暴走するイスラエル極右思想と修正シオニズム

Varietas delectat.

平凡社

B312.219
1

平凡社新書
1055

ガザ紛争の正体

暴走するイスラエル極右思想と修正シオニズム

宮田律
MIYATA OSAMU

横浜市立大学学術情報センター
007309640
受入

HEIBONSHA

二〇二三年一〇月七日、ハマスのガザ攻撃により、
多数の犠牲者が出たイスラエル。
一見すれば、パレスチナ側の暴挙とも受け止められるが、
ガザ地区やその周辺地域でのパレスチナ人が置かれる、
「アパルトヘイト」に通じる差別・虐待の実態からは、
起こるべくして起きた、ガザ紛争の正体が見えてくる。
極右政党によって暴走するイスラエル政府による、
非人道的支配の実態を明らかにする！

はじめに……9

第一章 イスラエルの過激な行動の歴史的背景……21
ポグロムとは何か?
ユダヤ人の「絶滅」を考えたナチスのホロコースト
ナチス政権下の反ユダヤ主義

第二章 イスラエルの極右と修正シオニズムの思想……35
修正シオニズムに基づく「テロ組織」
三大一神教が共生していたガザとそれでもパレスチナ人の排斥を考えるイスラエルの極右
強硬な発言を続けるイスラエルの財務相とシオニズムを否定するユダヤ人の良識
ハンナ・アーレントの修正シオニズムへの厳しい評価
イスラエルの平和主義者アモス・オズは修正シオニズムをどう見たか
入植地拡大を追求するイスラエル
ナチス・ドイツに協力した修正シオニストたち
パレスチナ和平を訴えるオリーブの木

第三章 アメリカで生まれた「ユダヤのナチズム」と形容されるカハネ主義……69
イスラエルでナチス・イデオロギー=カハネ主義者が与党に
イスラエル独立宣言と著しく矛盾するカハネ思想
ヨーロッパ・ユダヤ人の歴史的困難はイスラエル建国の正当な理由とはならない
カハネ主義を批判する国際社会
イスラエル社会を覆う人種主義と医療機関も攻撃するイスラエル
保育器から出されるガザの赤ん坊たち
増大するガザの人道危機——ナチズムの犯罪を繰り返すイスラエル
極右政党のカハネ主義のイデオロギー
カハニストのベングビール国家治安相

第四章 排除・殺戮の論理——シオニズムというナショナリズムの史的展開……103
ヨーロッパ国家体系から弾き出されたユダヤ人
ヨーロッパの国家体系に同化できなかったユダヤ人
シオニズム以前にはあったパレスチナの「共存」
現在のイスラエルで復活する「マダガスカル計画」

二〇二三年一〇月七日、ハマスのガザ攻撃により、

イスラエル極右勢力が提唱する「ウガンダ計画」

第五章 **イスラエル極右とは異なるユダヤ教の本質**……125

オスマン帝国領内で共存していたムスリムとユダヤ人
共存の都エルサレムの中心で「ガザで子どもを殺すな」と叫ぶ
シオニズムは破綻する?——イスラエルを離れる人々

第六章 **意図的に民間人や病院・学校を攻撃する イスラエルの軍事ドクトリン**……139

イスラエルの無差別な軍事作戦——ダヒヤ・ドクトリン
大虐殺(ジェノサイド)という「ユダヤの悲劇」をパレスチナ人に対して行うイスラエル
ガザの学童・学生を殺害し、教育機会を奪うイスラエル
ガザ空爆の非情
ワル・シャワを想起させるイスラエル軍のガザ地上侵攻
難民キャンプを空爆するイスラエルと孤立するアメリカ
イスラエルの「衝撃と畏怖」作戦ではガザは制圧できない
病院攻撃——イスラエルのウソの主張が明らかになった
イスラエルのアンバランスな「人質交換」の背景とパレスチナ人政治犯

第七章 **右傾化するイスラエルと、リベラル化するアメリカ**……171

アメリカのZ世代に読まれるビンラディンの「アメリカへの手紙」
イスラエルのガザ攻撃で利益を上げる軍産複合体に抗議するアメリカの若者たち
世界の若者はイスラエルによる戦争に反対する

第八章 **イスラエルの極右主義は 中東イスラーム世界の大変動をもたらすか?**……185

紛争、不安定が拡大する中東地域
イスラエル最大の安全保障上の脅威、ヒズボラ
イスラエルに報復を誓うイラン
ヨーロッパ植民地主義に倣ったガザ攻撃
パレスチナ人指導者・科学者たちの暗殺を外国で企てるイスラエル

第九章 **パレスチナ和平に 世界の世論の後押しが求められている**……203

世界は平和を求めた
暴力の行使は逆効果——ハマスを支持するパレスチナ世論

アルジェリア独立戦争のイスラエルへの教訓
アメリカのパレスチナ政策に反発するラテンアメリカ諸国
パレスチナに強い同情をもつアイルランド
「長老たち」は「紛争に軍事的解決はあり得ない」と訴える
イスラエルのジェノサイドを告発し、即時停戦を求める南アフリカの弁護団
おわりに——日本はイスラエルの極右政権に対して何をすべきなのか……224
「ハマスはテロ」という言葉と、イスラエルのガザ侵攻を批判した村上春樹
国連の「パレスチナ人民連帯国際デー」
日本は国際社会の一角にいた
日本の軍人とイスラエル兵のふるまいが重なる?
日本人が見たアラブとユダヤの共存
ホロコースト生存者たちの訴えと中東イスラーム世界の人々の日本への期待

はじめに

二〇二三年一〇月七日、パレスチナ・ガザ地区を実効支配するイスラーム主義組織のハマスはイスラエルを奇襲攻撃し、イスラエルの軍人・民間人など一二〇〇人が犠牲になった。イスラエルは二〇〇七年からガザを完璧なほどに封鎖していたため、まさに青天の霹靂のような攻撃だったことだろう。少なくとも第四次中東戦争（一九七三年）が終わって以降、これだけ多数のイスラエル人が犠牲になったことはない。

日本でガザをはじめとするパレスチナ情勢を日ごろウォッチしていなければ、ハマスの行為は残虐なものに思われただろう。

実際、岸田文雄首相は一〇月八日、パレスチナ自治区ガザを実効支配するイスラーム組織ハマスによるイスラエルへの攻撃を非難し、X（旧ツイッター）に「罪のない一般市民に多大な被害が出ており、我が国は、これを強く非難する」と投稿した。岸田首相はイスラエルによるヨルダン川西岸への占領の継続、占領地でのイスラエルによる入植地の拡大、イ

スラエル軍・警察による恣意的な逮捕、発砲などを批判してきたことはない。現在ヨルダン川西岸には七〇万人ぐらいのイスラエル人が不法な入植を行っているにもかかわらず、だ。

イスラエルが建設する入植地は東エルサレムを取り囲むように建設され、パレスチナ人たちが将来のパレスチナ国家の首都と考えているエルサレムへの実効支配を一段と進めている。イスラエルの極右勢力はエルサレムのイスラームの聖地であるハラム・アッシャリーフにしばしば足を踏み入れ、そこにユダヤの神殿を建設することを構想している。さらにガザでの生活は、イスラエルの経済封鎖によって失業率は五〇%を超えるなど著しく零落していた。ハマスの奇襲攻撃は、こうした日ごろの鬱積したパレスチナ人の思いを抜きに理解できるものではない。

ネタニヤフ首相がパレスチナ人に対して厳しい姿勢をとる背景の一つに、彼の兄であるヨナタン・ネタニヤフ（一九四六～七六年）がPFLP（パレスチナ解放人民戦線）のハイジャック作戦の中で殺害されたことがある。PFLPのワディ・ハッダード（クリスチャンの医師）に指導されたグループは旅客機のハイジャック戦術を行っていた。一九七六年六月にパリ行きのエールフランス一三九便はイスラエル・テルアビブを離陸後、PFLPと西ドイツの左翼組織に乗っ取られ、アフリカ東部のウガンダの「エンテベ空港」に強制着陸させられた。イスラエルは奇襲部隊をウガンダに派遣し、ウガンダのアミン大統領の

専用車と見せかけたベンツで乗客ターミナルに突入し、PFLPのメンバー六人を射殺した。このときイスラエルの奇襲部隊を指揮していたヨナタン・ネタニヤフ中佐が、ウガンダ兵に撃たれてイスラエル軍将兵の中で唯一死亡した。彼の実弟が、現在イスラエル首相を務めるベンヤミン・ネタニヤフだ。

ネタニヤフ首相を頂点とするイスラエルの極右を含む政権は占領地であるヨルダン川西岸にさらに一〇〇万人のユダヤ人たちを住まわせることを考え、将来的にはヨルダン川西岸をイスラエルに併合するつもりでいる。

一九四八年のイスラエル建国や、一九世紀後半以降、エルサレムにユダヤ人の国家を建設しようとするシオニズムによってユダヤ人たちがパレスチナに大量に移住してくる以前、パレスチナで暮らしていたユダヤ人たちは、アラブのムスリムやクリスチャンたちと共存し、アラビア語を話していた。現在のパレスチナ人のムスリムやクリスチャンと同様に、神のことを「アッラー」と言い日常の挨拶の言葉は現在のアラブ人と同様に「アッサラーム・アライクム（あなたの上に平安あれ）」だった。

現在のイスラエル領、ヨルダン川西岸、ガザ地区と重なる地域では一六世紀の中葉にはユダヤ人人口は一万人にも満たなかった。オスマン帝国資料では一九世紀中ごろのパレスチナの人口は六〇万人程度、八〇%がムスリム、クリスチャンは一〇%、そしてユダヤ人

は五%から七%といったところだった。シオニズムの潮流があるまでユダヤ人はごく少数派だった。

シオニズムによるユダヤ人の大量移住前のオスマン帝国のパレスチナではユダヤ人は、彼らにとって聖地であるサフェド、ティベリア、ヘブロン、エルサレムに住んでいた。エルサレムを除いてこれらの都市に住む人々は主にアラビア語か、ユダヤ・スペイン語（＝ラディーノ語）を話していた。ユダヤ・スペイン語はユダヤ人がイベリア半島から追放される以前に話していた言語で、一五世紀末のスペイン語の特徴を残していると見られている。一八八二年のエルサレムでは、七六二〇人のセファルディム（スペイン・ポルトガルに住んでいたユダヤ人）／ミズラヒム（中東に住んでいたユダヤ人）／マグレビム人（北アフリカに住んでいたユダヤ人）が登録されて、そのうちの一二九〇人が北アフリカ出身の「マグレビム」と呼ばれるユダヤ人たちだった。これらの都市に住むユダヤ人たちの国籍はオスマン帝国で、アラブ人とのコミュニケーションはアラビア語で行われていた。

イスラエルがパレスチナ人たちをアパルトヘイトに置く契機になったのは、言うまでもなく、ユダヤ人のナショナリズムであるシオニズムによってイスラエル国家が成立したことや、一九六七年の第三次中東戦争でパレスチナを占領下に置き、またアメリカがイスラエルの占領政策を既成事実として容認していることが大きい。

一八世紀のフランス革命を契機にするナショナリズムが台頭する以前、パレスチナではアラブ人とユダヤ人の対立はなく、一五世紀にイベリア半島からユダヤ人たちが追放されると、イスラームのオスマン帝国はユダヤ人たちを歓迎して受け入れた。絹などの織物技術や、オスマン帝国が貿易関係をもっていた国々とのユダヤ人たちの通商交渉・仲介能力にオスマン帝国政府は注目していた。ヨーロッパから追放されたユダヤ人たちはオスマン帝国のサロニカ（テッサロニキ、ギリシア北部の都市）、エルサレム、サフェド（アラビア語ではサファド）などに移住してきた。

イスラエルは、エルサレムは古代ユダヤ王国の首都だったからイスラエルの首都であると主張する。しかし、アラブ・イスラーム勢力はエルサレムを一二〇〇年間にわたって支配したのに対して、ユダヤ支配は四二四年間にすぎない。ユダヤ人たちは西暦七〇年にローマ帝国によってエルサレムを追われ、離散（ディアスポラ）状態になったと考えられている。エルサレムは、第一次世界大戦中の一九一七年一一月にイギリスが占領するまでイスラーム支配が継続していた。古代に支配していたから自らの土地であるという理屈は現在の国際社会の秩序を混乱に陥れるものだ。そのような主張を世界の多くの国が行うようになったら、さらに多くの地域紛争が発生することだろう。

ここで簡単にパレスチナ問題の歴史をふり返ってみよう。ユダヤ人たちも一九世紀以降、

ヨーロッパで台頭したナショナリズム思想に影響されるようになり、彼らはヨーロッパの国民になれないのならば、ユダヤ人の国をパレスチナにもとうという考えに至る。この考え、イデオロギー、運動のことをシオニズムという。ユダヤ人にとって「シオンの丘」はエルサレムの別称だった。シオニズムに従ってパレスチナに移住するユダヤ人の数は増加し続けたが、元々住んでいたパレスチナ・アラブ人は土地を奪われることになり、彼らとの軋轢を生んでいった。第一次世界大戦が終わると、国際連盟によるパレスチナの委任統治を行ったのはイギリスだったが、イギリスはアラブ人と、ヨーロッパ各地から移住してくるユダヤ人との間の利害の衝突を調停することができなかった。

ドイツで一九三三年にナチスが政権を掌握すると、ユダヤ人のいっそうの排斥や弾圧が行われ、ドイツがさらに第二次世界大戦によってポーランドなどに支配地域を拡大すると、いっそう多くのユダヤ人たちをその支配下に抱えることになり、ユダヤ人たちは最終的には強制収容所で大量に虐殺された。ナチスの虐殺によるユダヤ人の犠牲者の数は六〇〇万人とも見積もられている。ナチスによるユダヤ人のホロコースト（大虐殺）の実態が戦後明らかになると、欧米諸国ではユダヤ人に対する強い同情が生まれ、ユダヤ人国家創設の考えが支持されていった。しかし、パレスチナにユダヤ人国家を建設することは先住のアラブ人の犠牲の上にヨーロッパの贖罪が行われることを意味していた。これはパレスチナのアラブ人には到底認められないことで、一九四七年一一月の国連パレスチナ分割決議に基づいて、翌四八年五月にイスラエルが独立を宣言すると、これを断固認めないパレスチナ人やアラブ諸国はイスラエルに宣戦布告した（＝第一次中東戦争）。

第一次中東戦争はイスラエルが装備、士気に優っていたこともあって、イスラエルが勝利して独立を維持することになった。一九五〇年代になると、イスラエルに敗北したエジプトではムハンマド・アリー朝のファルーク国王の無能が強く意識され、五二年七月にガマール・ナセルらを中心とする青年将校らによってクーデターが発生した。ナセルはイギリスがエジプトにもっていたスエズ運河を国有化するなど、アラブの統一、発展、繁栄を唱えるアラブ・ナショナリズムに訴え、中東からイギリスやフランスなど帝国主義諸国の影響力を排除して、アラブ民衆の熱烈な支持を得ていった。

パレスチナ人に強い同情をもつアラブ・ナショナリズムはイスラエルにとって脅威となったが、一九六七年六月、イスラエルはエジプトやシリアに先制攻撃を行い（＝第三次中東戦争）、圧倒的な勝利を収めてガザ、ヨルダン川西岸、東エルサレム、ゴラン高原、シナイ半島を占領した。特にヨルダン川西岸と東エルサレム、ゴラン高原の占領は現在でも継続し、さらにイスラエルは国際法に違反してイスラエル人の入植地（住宅地）を拡大している。また、ガザでイスラーム勢力のハマスが二〇〇六年から実効支配を開始すると、

イスラエルは翌〇七年からガザに対する経済封鎖を行い、ハマスの拠点であるガザはイスラエル軍のたびたびの空爆をはじめとする攻撃を受け、子どもや女性など市民の犠牲者が多く出る事態となった。

国際法では軍事的に占領した土地から軍隊は撤退しなければならないし、また占領地住民の土地や財産を奪ってはならないことになっている。イスラエルはこの国際法（＝ジュネーヴ第四条約）を破り、占領を継続してパレスチナ人の土地や財産を奪い、イスラエル人のための住宅（＝入植地）を続々と建設している。

二〇一八年にガザの人々は帰還のための大行進をしたが、それにイスラエル軍は発砲し、一八年三月三〇日から一九年一二月二七日までの間に二二三人のガザ市民が亡くなっている。ガザ住民の七五％の家族は、現在イスラエル領となっているビールシェヴァやスデロットなどイスラエル南部の出身で、国連決議によれば帰還権を認められているが、イスラエルはこの帰還をいっこうに認めることがない。

パレスチナ保健省によれば、二〇一四年七月八日から八月二六日までのイスラエルによるガザ攻撃では、パレスチナ人二三一〇人が犠牲になり、そのうち七〇％が市民だった。ガザは「世界最大の監獄」とも形容され、パレスチナ人たちの移動や、物資の搬入に厳格な制限があり、建築物資の不足のためにインフラや住宅の整備も極端に滞ってきた。パレスチナ人たちがガザで利用できる清潔で、飲料に適する水は全水量のわずか四％とも見積もられている。さらに電力の制限もあり、一日数時間しか電力の使用ができない状態になっている。

国際法ではパレスチナ人には民族自決権があるが、イスラエルはこの民族自決権の行使であるパレスチナ国家創設を認めていない。アメリカのトランプ前政権は、パレスチナ国家創設を後押しする姿勢などまるでなく、ネタニヤフ首相が主張するパレスチナ全域（イスラエル、ヨルダン川西岸、ガザ地区、ゴラン高原を合わせた地域）に対するイスラエル一国支配でもよいというスタンスをとった。

二〇二二年一二月にイスラエルで極右を含むネタニヤフ政権が再び成立すると、翌年の三月に極右の「宗教シオニズム党」の指導者であるスモトリッチ財務相は、ヨルダン川西岸のパレスチナ自治区のフワーラ村（人口七〇〇〇人）を「消滅させる必要がある」と発言した。また同月、スモトリッチは、パリで開かれたユダヤ人らの会合で「パレスチナ人など存在しない」、「歴史も文化もない」などと発言した。

同じく極右政党「ユダヤの力（オツマ・イェフディート）」のイタマール・ベングビール国家治安相も「岩のドーム」やアル・アクサー・モスクなどがあるイスラームの聖地であるハラム・アッシャリーフの敷地内に足を再三踏み入れ、パレスチナ人ムスリムの宗教感

二〇二三年一〇月七日、ハマスのガザ攻撃により、

情を逆なでする行為を繰り返している。二〇二三年六月二三日、ベングビールは、イスラエルの治安状況を安定させるために数十人、あるいは数百人、さらには数千人のパレスチナ人を殺害することがイスラエル政府の責務であると語り、彼はパレスチナ人を「テロリスト」と呼んでいる。イスラエルの治安のためにパレスチナ人殺害をあからさまに唱道するイスラエル極右の政治家たちは異様な心理をもっていると言わざるを得ないだろう。

こうしたイスラエルでの極右閣僚たちの言動もパレスチナ人たちの反発や危機感を招き、二〇二三年一〇月七日のハマスによる攻撃の一つの背景となった。イスラエルには数千人とも見積もられるパレスチナ人政治犯が拘束されていて、中には裁判を受ける権利もなく行政拘留されている人たちもいる。ハマスは誘拐したイスラエル人たちをパレスチナの政治犯の解放のための「手段」として用いたかったに違いない。

第二次世界大戦後に行われたニュルンベルク裁判では、IMT（国際軍事裁判所）憲章第六条に基づき、ナチス・ドイツの被告たちは、平和に対する犯罪（数々の国際条約に違反する侵略戦争の計画および遂行）、また人道に対する犯罪（すなわち、戦前および戦中の一般市民に対する殺人、殺戮、奴隷化、移送、その他の非人道的な行為、または軍事裁判の所轄圏内で行われた犯罪に伴う、または関連した政治、人種、または宗教に基づく迫害）などで裁かれた。これらの罪状は、ガザを攻撃するイスラエルの行為にほとんどすべて当てはまる。

イスラエルはなぜこれらの行為に国際社会の反発があるにもかかわらず手を染めてしまうのだろうか、その歴史的、思想的、軍事的要因や背景を本書では探ってみることにする。背景の一つにはイスラエルの領土的絶対性を考え、アラブ人（パレスチナ人）との共存の可能性を排除する極端なナショナリズムである「修正シオニズム」のイデオロギー的系譜があり、ユダヤ人のヨーロッパでの迫害を受けた歴史や長年のアラブ人との対立によって、「やらなければやられてしまう」という発想がイスラエルでは根強く定着している。

ベングビール国家治安相のように、イスラエルの治安の安定のためにパレスチナ人殺害を唱道するのは異様な心理と言えよう。本書は、ガザ紛争でどうしてイスラエルが国際社会から反発されても、民間人の犠牲を伴うような攻撃を意図的に行うのか、また病院や学校、モスクなど医療、教育、宗教施設などパレスチナ人にとって生活に欠くことができない建造物や基本インフラに対して破壊の限りを尽くすのか、さらにナチス・ドイツがユダヤ人の大量移送を行ったように、パレスチナ人をガザから追い出そうとするのか、イスラエルで台頭、定着する極右思想を基にして、その活動の背景が理解できるようにしたい。また、アメリカでは若者を中心に従来のイスラエル絶対支持の姿勢が崩れているが、パレスチナ問題をめぐるアメリカの政治・社会の変容についても触れたい。さらに、日本は極右が支配するイスラエル政治にどう向き合うべきなのかを考えてみたい。

二〇二三年一〇月七日、ハマスのガザ攻撃により、

第一章

イスラエルの過激な行動の歴史的背景

アメリカ・ワシントンDCホロコースト博物館。ワシントン・モールに近いワシントンの中心とも言える場所にある（筆者撮影）

9784582860559

1920230010008

ISBN978-4-582-86055-9
C0230 ¥1000E

定価：本体1000円（税別）

著者紹介

宮田律（みやた おさむ）

1955年山梨県生まれ。現代イスラム研究センター理事長。83年慶應義塾大学大学院文学研究科史学専攻修了。米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）大学院修士課程（歴史学）修了。専攻はイスラム地域研究、国際政治。著書に『黒い同盟 米国、サウジアラビア、イスラエル』『アメリカのイスラーム観』（以上、平凡社新書）、『武器ではなく命の水をおくりたい 中村哲医師の生き方』（平凡社）、『イスラムの人はなぜ日本を尊敬するのか』（新潮新書）、『石油・武器・麻薬』（講談社現代新書）など。

学術情報センター
00730964 0
横浜市立大学